



©Yuki Nakase

演出家と芸術家

Just Do It.

今年も早いもので師走ですね。上の写真は芸術家ニーン・ハンフリーさんと演出家マロリー・カトレットさんが、オフオフ・ブロードウェイ作品『サークリング・ザ・センター』の最終ゲネプロを終えてホッとしている様子です。彼らと一緒に仕事をさせていただいたこの作品は、ハンフリーさんが夫の喪に服している中で知り合った、ヴィクトリアン・モーニング・ブレイズからヒントを得たアート・インスタレーションとパフォーマンス・アーツの融合でした。私にとってはこの作品が照明デザインの仕事取めで、彼ら同様、ホッとした瞬間にシャッターを切りました。

ヴィクトリアン・モーニング・ブレイズは、19世紀にフランスとイギリスの上流階級の間で大流行したヨーロッパの習慣です。亡くなった大切な人の破片をとっておきたい遺族が、死者の髪の毛を使って芸術品を作るというもので、そのほとんどは身に着けることができるアクセサリでした。現在、それらの作品はアンティークショップで見ることができます。ハンフリーさんはそれらが遺品という物質的な価値だけでなく、編み込む反復作業そのものが遺族の脳を刺激し喪失感を癒す医学的な根拠を掴むまでリサーチを重ね、その結果が今回の作品発表となったそうです。

この写真の瞬間にホッとしたのもそのはず、それまでに色々ドラマがありました。まず仕込み日の朝に現場に到着したら、目にしたのは約束されていた劇場の基本仕込みではなく、私たちの前にこの劇場で開催された作品の器材とケーブルが照明パトンにそのままになっている状況です。撤収作業から始める羽目になっただけでなく、行方不明または不具合のある劇場器材の搜索と応急処置へと発展し、当

初7時間と予想していた仕込みは17時間かかりました。技術統括者と小屋側の仕事放棄によるシワ寄せが完全に照明にふりかかった例です。

オペレーターの報酬は時給制なので、このような場合のオーバーした時間の人件費を誰がもつかを主張・議論するにあたっては、作業延滞の原因の追究が鍵となります。訴訟を起こすような規模の金額が動く現場以外は弁護士がいるわけでもなく、遅れたのは誰のせいかわからないままに誰かが責任を負う(延長料金を払う)結論に至るまで、しばしば熾烈な戦いとなります。今回も険悪なメールのやりとりが一時現場の空気を濁らしましたが、結果的に劇場の担当者が非を認め、照明チーフの臨機応変さと大らかな人柄が現場を丸く収め、私はデザインに集中することができました。舞台製作に携わるときにいつも思いますのは、照明デザインは最後の甘いデザートのようなご褒美で、それに至るまでのマネージメント業務が仕事の大半です。

『サークリング・ザ・センター』で締めくくった今年も良い一年でした。何かを「良かった」と終われることは幸せなことです。いつか私の身体の終わりが来るときに悔し涙を流しながら人生の幕を閉じることはないように精一杯生きたいと言うのは、人の命の儚さを真に理解していないせいかもしれません。精一杯生きている途中でフッと終わってしまい、さよならも言えないまま永久にお別れしてしまうことが多いから人生には必ず悔いが残り、遺族にとってはヴィクトリアン・モーニング・ブレイズのような気持ちの整理が必要なのでしょう。いま生きている私にできることは最後の一瞬まで目の前の課題に全力で応え続けるのみです。